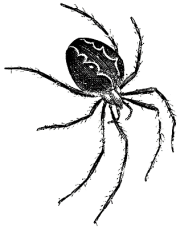


遊絲

No. 13

2003 - 11 - 25

日本蜘蛛学会



トピックス

東大雪の自然を満喫した第35回大会

大会の感想は、大会への出席回数がまだ少ない若手研究者、そうでなければ最近の参加がせいぜい数年おきという方に書いていただくのがいい。大会の運営や発表内容などに対して少し距離をおいた見方が期待できるから。「遊絲」と

「Acta」のどちらの編集陣も、かような基本方針で執筆者を選んでいるが、今回は、ちょっとした事情で、すでに誰も若手とは言ってくれそうにない年齢に達し、大会にもこの数年は皆勤している私が書かせていただくことになった。おゆるしのほど(次号 Acta のほうには上の選出基準を正しくクリアしている二見さんによる印象記が出ます)。

第35回大会は2003年8月22~24日の3日間の日程で、北海道上士幌町糠平の糠平温泉文化ホールで開かれた。私は1978年からの9年間を北海道で過ごし、その後も学会などで何度か北海道を訪れる機会があったが、糠平はもとより十勝地方を旅するのは初めてだった。そ

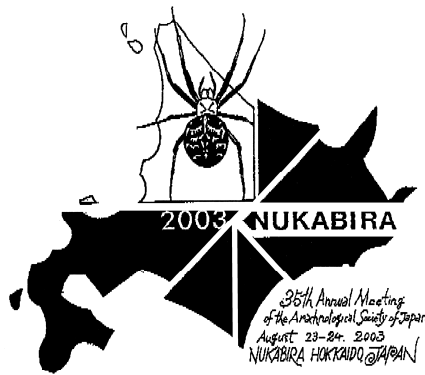
れで、この大会への参加は早くから楽しみにしていたが、旅程を計画する段になって航空便や路線バスを調べてみたら、その乗り継ぎ回数の多さに怖気づいた。乗り継ぎに遅れると出発日のうちには到着できないかもという不安もよぎった。帰りに、現在やっている研究上の用事で札幌市の円山と近郊の野幌に寄って帰りたかったのだが、それを効率的にすますためにも、帯広空港からはレンタカーを借りることにした。

大会事務局でお世話いただいた宿泊先の糠平館観光ホテルに着いたのは21日の夕方である。

前日から泊まられているという東京蜘蛛談話会の合宿の一行にまぎれてモガニが1匹まるごとついた豪勢な夕食をとった(カニが苦手という奇特な人のお蔭で私は2匹をゲットした)。

翌22日は午前中が空いていたので、はじめは東京蜘蛛談話会の採集

にくっついて国道273号線を三国峠方面に15kmほど上がった幌加除雪ステーションというところまで出かけた。明るいシラカバ林にはなつかしいキバナオニグモがたくさんいた。樹幹に産雌単為生殖種のザトウムシも見つけ(実は、今回の北海道行きにはこの仲間のDNA分析用サンプルを集めるという用事もついていた)みなさんに紹介したが、これには雌では実



体顕微鏡下で上唇の形をみないと区別できない 2 種がいるため、「タマヒゲザトウムシかヒラスベザトウムシのどちらかです」というような煮え切らない説明しかできないのがもどかしい。さらに、国道をはさんで反対側のトドマツ林にも数人の方といっしょに入った。トドマツの独特の匂いがなつかしい。林下にこれまたなつかしいナンブソウを見つけた。これは東北地方の一部と北海道にしか分布しないメギ科の植物であるが、いっばう変わった姿をしており、昔、札幌の近郊で初めてみたときは科の見当さえつかなかった。よく覚えていた(といたいところだが、記憶の底に沈んでおり、名前を思い出すまでに 15 秒ほどかかった)。誰も知らないだろうと思い、この植物の名前わかりますかと訊ねてみたら、おもいがけず知っている方がおられて驚いた。その須藤昌子さんはじつは留萌からお越したと伺って、納得した。同好の方との散策・観察会は楽しく、もう少し留まりたかったが、今回どうしても訪れてみたかった然別湖へ立ち寄る時間が大会終了後にはとれそうになかった。このあとは一人でそちらに回った。

さて、今回は開催地の関係でほとんどの方が前日から宿泊となることから、大会のプログラムに正式に組み込まれたと思われる観察採集会(ひがし大雪博物館と共催)は初日の 19 時より始まった。ひがし大雪博物館前に集合して、その周囲や散策路を懐中電灯で照らしながら一周するというコースである。私はサーチングイメージがザトウムシ仕様になっているため、どうしても空中よりも崖地のようなところに眼が向く頻度が高いが、そのような崖地の岩の隙間にはエゾガケジグモが巣穴の入口に顔をのぞかせていた。北海道在住時代は慣れ親しんだクモだが、夜間観察はしたことがなかったので、こ



エゾガケジグモ



マユミオニグモ

んな姿ははじめてみた。観察会も佳境を迎えるころ、この観察会で最も目当てとされていたマユミオニグモ *Araneus mayumiae* Tanikawa 2001(マユミはもちろん今回の大会委員長である松田まゆみさんに因む)をどなたかが見つけられ、歓声があがった。大きくて、複雑な紋様と色合いの美しい印象的なクモだった。北海道でも大雪山周辺でしかみられないクモだという。

大会は 23 日の 9 時から、糠平温泉文化ホールではじまった。ひがし大雪博物館に隣接した立派なホールで、会場はゆったりしており、快適だった。宿舎の糠平館観光ホテルからは木立に囲まれた気持ちのよい道を歩いてせいぜい 5 分の至近距離というのも嬉しかった。



シンポジウムの演者

左から 川辺百樹，保田信紀，鶴崎展巨，松田まゆみの各氏

午前中は分類・分布関係の口頭発表 7 題とポスターが 4 題。中でも新海明さんらによる「県別クモ類分布図の作成(中間報告)」と題された，県別クモ類分布表示のパソコン用プログラムの，液晶プロジェクターによるデモには驚かされた。共同研究者の安藤昭久さんがソフトを開発し，谷川明男さんたちがせっせと入力したというこのデータベースは公開予定もあるそうでたいへん楽しみである。県ごとの記録の有無が一目瞭然なので，各種の分布の把握に便利であるのみでなく，各地の採集データの公表を促進するうえでも大いに役立つに違いない。既報の文献データのみを入力するというストイックな姿勢が好きである。出所のよくわからないデータの氾濫はよくない！各地の採集データはとにかく公表を！という新海明さんのかねてからのメッセージをひしひしと感じた。

午後は「北海道の生物地理」についてのシンポジウム。この 20 年ほどの間に，北海道のクモとザトウムシについての知見は飛躍的に増えた。また，ロシア極東やサハリン，千島もロシアの若手のクモ研究者によって精力的に調査され，それらの結果は英文論文として日本でも容易に入手できるようになった(20 年前には文献自体の入手が困難で，しかもロシア語でしか読

めなかった)。北海道で初めての大会となる本大会で，このテーマでシンポが企画されたことはたいへん意義深かったと思う(演者の一人になった立場でこう書いては内輪誉めのように聞こえそうだが)。欲をいえば，個々の講演のあとにも質疑応答の時間があるとよかった。そのほうが質問しやすかったのではないだろうか。5 つの講演にはいろいろな視点のものが入り混じっており，総合討論でどこに焦点を絞るかはなかなか難しい面があったように思う。私自身もいま思えば他の方の講演内容をあまり消化しきれていなかった。

その夜は，糠平館観光ホテルで懇親会。そのあとも宿舎で遅くまでクモ談義をしていた部屋もあったようである。

たとえば



2 日目の午前中は、分子進化・分子系統に関わる 1 題（今回学会奨励賞を受賞した桑田隆生さんによる）と、生活史・生態、行動関係の口頭発表 5 題。内容が濃くレベルも高い仕事さろっていて、聞き応えがあった。11 時には全日程を終了し、帯広駅行きの送迎バスがすごく慌ただしく出発した（このバスに乗り込む井原さんに渡そうとした 99%エタノール入りの瓶をホテルに走って取りに戻ったら、タッチの差で出発して行ってしまった）。その午後にはザトウムシ採集等の用事のため一人で三国峠を越えて大雪湖方面まで走った。この道はニペソツや石狩岳、クマネシロ山に囲まれた広い高原の中をほとんどまっすぐに走っている。はじめて通ったが、絶景で気分爽快な道だった。採集・写真撮影の目的のいくつかは果たせなかったが、立ち寄った大雪湖レークサイトという自然公園の駐車場ではマザトウムシ *Phalangium opilio* の生息地を見つけるなどの予想外の成果があった（本種は染色体に面白い課題があるのだが、



2 種の T シャツ

そのことに気づいてから国内で本種に出くわす機会は一度もなかった）。翌朝は帯広経由で札幌方面に移動するつもりだったが、野幌を目的地に設定して車のカーナビを立ち上げたら、層雲峡ー旭川回りのほうが近いことがわかり、またこの国道 273 号線を北上することになった。

大会の話にもどるが、今回、参加者全員にクモがデザインされた T シャツ（デザインは小澤實樹さん）のおみやげがあったのは嬉しかった。デザインは 2 種類あり、私はオニグモ類の腹部の模様がいくつかあしらわれたほうを入手した。

隣接するひがし大雪博物館には大会前日に立ち寄ったが、展示が面白かった。とくに、ガイドブックにも紹介されている世界の昆虫の膨大な数の標本に圧倒された。6 時という早朝から開館しているのは、糠平温泉には夕方に到着して翌朝には発ってしまうという観光客が多いためだそう（たしかにホテルには時刻になると多くの観光バスが泊まっていた）。早朝に体験できるイベントとしては気球の体験搭乗とか、エゾシカが見られるエコツアーも用意されており、大会参加者の中にはこれらを体験された方もおられたようである。

渓谷に面した糠平館観光ホテルには屋内の大浴場のほか、露天風呂や混浴露天風呂もあってくつろげた。食事もおいしかった。私は結局最終日を含め 4 泊したが、夕食のおかずが全部異なっていたことに感心したりした。

これらもすべてを含め、今回の大会は満足度満点であった。大会の準備委員会の松田まゆみさん、川辺百樹さん、スタッフの方々にはたいへんお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

なお、次回大会は緒方清人さんのお世話で、愛知県の豊橋市自然史博物館で開催予定だそうです。

鶴崎展巨（鳥取大・教育地域）



同好会情報

ここでは日本各地にあるクモ同好会で発行されている定期刊行物の内容、採集会や講演会（総会・例会）の日程などを紹介する。興味を持たれた方は入会したり、行事に参加されてはいかがだろうか。

中部蜘蛛懇談会（会長：緒方清人）

会報「蜘蛛」を年 1 回、「まどい」を年 3 回発行。採集会を年 2～4 回、合宿を年 1 回、総会・研究会を年 1 回実施。

・総会・研究会は 2004 年 2 月 11 日に実施

蜘蛛（KUMUO）36 号（2003. 10. 18 発行）
徳本 洋：山形県庄内地方におけるジョロウグモの垂直分布

杉山時雄・大原満枝：カトウツケオグモの捕食行動の観察

益田和昌：愛知県西加茂郡藤岡町の倍足類

益田和昌：岐阜県不破郡垂井町の倍足類

益田和昌：岐阜県揖斐郡池田町の倍足類

益田和昌：三重県員弁郡大安町の倍足類

益田和昌：三重県飯南郡飯高町の倍足類

板倉泰弘・近藤昭夫：スジアカハシリグモの生活史：幼体の網と成長に伴う生息場所の変化

短報

益田和昌：台湾で採集されたフサヤステ

益田和昌：フジヤステの交接時期について

入会申し込み

〒444 - 0075 岡崎市伊賀町 4 - 62 - 3

板倉泰弘（事務局）

Tel：0564 - 28 - 5857

E-mail：yasuhi@deluxe.ocn.ne.jp

会費

正会員 年 3000 円（高校生以下 1000 円）

準会員 「まどい」のみ 1000 円

三重クモ談話会（本部：橋本理市）

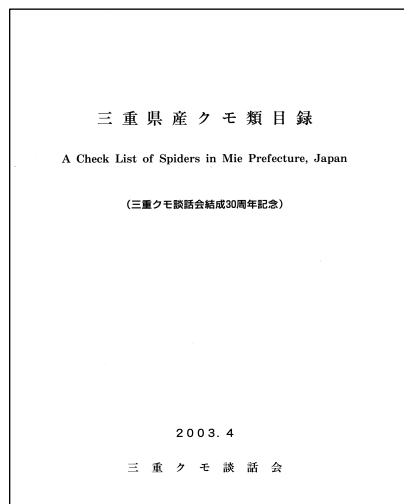
会報「しのびくも」を年 1 回発行。採集会・合宿・例会などを年数回実施。

・採集観察会は、2003 年 12 月 7 日（日）に実施。調査場所や集合時間等はその都度決定。

来年はこの他に伊勢神宮宮域の調査を月 2 回程実施。参加希望者は 1 週間前までに事務局まで連絡を。

三重県産クモ類目録（2003. 4. 30 発行）

過去の文献から三重県のクモ類に関するデータを可能な限り収集し、44 科 225 属 510 種を掲載。



三重県産クモ類目録

しのびぐも 30号(2003.3.31発行)
内容は、遊絲12号を参照のこと。

入会申し込み
〒515-0044 三重県松阪市久保町1843-157
貝發憲治 (事務局)
Tel (Fax) 0598-29-6427
会費 年3000円

和歌山クモの会(会長:米田 宏)
会報「和歌山クモの会会報」を年1回発行。
総会・観察会を年1回実施。

和歌山クモの会会報 No.12(2002.9.30発行)
内容は、遊絲11号を参照のこと。

入会申し込み
〒649-6264 和歌山市新庄188
和歌山県立和歌山高等学校内
青木敏郎(事務局)
会費 年1000円

東京蜘蛛談話会(会長:新海栄一)
会報「KISHIDAIA」を年2回、「談話会通信」
を年3回発行。採集会年4回、合宿年1回・総
会例会などを年2回実施。

・今年度の採集会は、埼玉県入間市・所沢市の
「さいたま緑の森博物館」で実施。

2004年2月15日(日)

西武池袋線小手指駅南口 午前10時10分集合。
世話人 今井正巳(042-755-3086)
・例会は、2003年11月30日(日)午前10
時から

東京環境工科専門学校 〒150-0011 渋谷区
東2-5-3

JR渋谷駅東口(東急文化会館側)より、「学
03日赤医療センター行」バスにて5分、「國学
院大学前」下車、徒歩1分、170円

*昨年までの場所から変更しているので注意
のこと。

緊急の連絡先は、
加藤輝代子 090-7012-6458
初芝 伸吾 090-6156-8378 まで

KISHIDAIA 85号(2004.1月発行予定、
内容未確定)

入会申し込み
〒186-0002 国立市東3-11-18-201
(有)エコシス 初芝伸吾 (事務局)
Tel 042-571-1012
E-mail:hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp
会費 年3800円(学生 2000円)



東京蜘蛛談話会10月の観察採集会に
参加された方が履いていたクモの網模様の靴

関西クモ研究会(会長:山野忠清)
会報「くものいと」を年2回発行。採集会、
研究会例会などを年数回実施。

・例会は、2003年12月21日(日)に大阪市
の四天王寺高校で実施の予定。

くものいと 34号(2003.9.30発行)

クモリスト

吉田 真:滋賀県南東部のクモ

赤松史憲:採集散策日記 - 奈良県當麻町(神社編)

関西クモ採集会特集

関西クモ研究会採集会の記録 - 大阪府箕面市箕面公園(2003年6月1日)

村上協三:観察会に参加して

黒田 誠:クモ採り

黒田あき:初めてのクモ採集

勇介美術館

同定指南

田中穂積:コモリグモ科 Lycosidae(その2)

海外の研究トレンド(6)

榭元敏也:虫を誘引する体色

新刊紹介

加村隆英:「沖縄クモ図鑑 めずらしい沖縄のクモ 217種!」谷川明男著

研究観察報告

船曳和代:野外で出会ったちょっと面白いこと

東條清さんを悼む

山田さやか:東條先生の思い出

吉田 真:東條先生を悼む

西川喜朗:東條清先生をしのんで

入会申し込み

〒567-8502 茨木市西安威2-1-15

追手門学院大学生物学研究室内

関西クモ研究会

Tel: 0726-41-9550(加村研)

Fax: 0726-43-9432(大学教務課)

会費 年1000円

関西クモゼミ

1~2ヶ月に1回,滋賀県草津市の立命館大学で開催.会費などなく誰でも参加できる.

連絡先

立命館大学理工学部生物工学科 吉田 真
077-561-2660

E-mail: myoshida@se.ritsumeai.ac.jp

東京クモゼミ

毎月1回,第1日曜日に千葉縣市川市の加藤宅で開催.会費などなく誰でも参加できる.

連絡先 新海 明 0426-79-3728

または,加藤輝代子 047-373-3344

言いたい!聞きたい!



スパイダーウォーズ外伝 No.128-134
エクアドル紀行 6-12

吉田 真

エクアドル紀行 6

僕はいま,アマゾン源流,ペルー国境にいる.赤道直下,標高300mほどの低地というのに,ここは思ったより暑くない.最高気温は28くらい.朝方は肌寒いほどだ.

森の中で,異様なものを見た.5m x 5mほどもある垂直の土の壁が目の前に現れたのだ.その向こうには,木が横たわっている.これは,大木が倒れ,地面がはぎ取られたものであった.よく見ると,このような土の壁は森のあちこちで見られた.熱帯雨林は高温多湿で,分解速度が大きいために土壌は薄く,厚さは20センチほどしかない.その下は母岩である.コンクリートの上に土や人工芝を張ったドーム球場のよ

うなものだ。

このような場所では、樹木は何メートルも深く根を張ることはできない。大木を支えるためには、浅く広く根を張るしかない。沖縄のガジュマルのように板のような根を放射状に張るもの（板根という）や、アイアン・ツリー（鉄の木）のようにつかえ棒のような根をたくさん張るものがある。アイアン・ツリーは、その名の通り非常に固く、先住民族の住居の建築に使われている。それでも強風が吹くと、大木はもろくも根こそぎ倒れる。地中深く根を張っている温帯の木は、家が潰れるほどの強風にも耐えることができる。こうしてみると、熱帯雨林の基盤は、意外なほど脆弱なのだ。

熱帯雨林には樹木の上で生活する着生植物が多い。雨が多いので、地面に根を張らなくとも生きていける。ミネラルは落ち葉から取るらしい。着生植物は上方に放射状に葉を伸ばし、落ちてくる葉を「捕獲」するのだ。着生植物の根元には雨水がたまり、ボウフラがわいている。このボウフラを食べて蛙になるオタマジャクシがいるらしい。この数ccの水たまりが、オタマジャクシの「池」である。熱帯雨林は、非常に多くの生き物が直接間接のさまざまな関係で結ばれながら生活する「複雑系」である。

蔓（ツル）植物も多い。樹木に巻き付いて成長するものもあるが、樹冠部からまっすぐに垂れ下がっているものが多い。これは、樹冠部で種が発芽し、下へ下へと成長したものである。地上に到達すると、蔓植物は根を張り、地中から水とミネラルを吸い上げる。蔓植物の中には、樹木を完全に包み込んで殺してしまう“Tree Killer”もいる。森の中の掲示板に、アチュアル族の神話が紹介されていた。

アチュアル族の神話

昔、天上と地上は「猿梯子の蔓（サルばしご

のツル）」で結ばれていた。男はこの蔓を伝って地上におり、一人の女と結婚した。しかし、この結婚は長くは続かなかった。二人の間で諍いが絶えなかったためである。そこで男は女と別れることにし、猿梯子の蔓を伝って天上に帰った。彼は彼女が追ってくることを恐れ、蔓を切ってしまうように、リスザルに命じた。森に垂れ下がっている蔓が今では天界まで通じておらず、樹冠部までしか登れないのはこのためである。

男はのちに月となり、私たちは夜ごとに彼の姿を見ることができ。残されたかわいそうな女は、Potoo（森に住む鳥の一種）となった。恋しい男を慕うPotooの悲しい歌が月の光に照らされた森の中から聞こえてくるのを、私たちは聞くことができる。

エクアドル紀行7

アマゾンに来て三日目。我々は先住民族のアチュアル族を訪ねることにした。参加者は吉田・船曳・五十嵐とアメリカ人の若いカップル（ジョンとマリア）。エクアドル人のアレクサンダーとアチュアル族のガイドが付いた1時間ほどの船旅である。陽気で脳天気なアメリカンに見えたジョンとマリアは、話してみると、とんでもない真面目人間。彼は高校の先生、彼女はマーケティング・リサーチの仕事をしているビジネスウーマンだが、先住民族の歴史や暮らしに興味があり、休みを取ってあちこちの部族を訪れているという。アチュアルの神話を教えてやったら、ファンタスティックだと喜んでいて。

ジョンが肩を叩くので振り返ると、後方の空が真っ黒。雨のカーテンが猛スピードで追いかけてくる。そしてまもなく、激しい雨が音を立てて降り始めた。スコールである。迂闊にも、我々は雨具を持っていなかった。乾季だという

し、今まで雨に降られたことがなかったための油断である。あっという間にピシヨピシヨになり、仕方がないので、近くにあったビニール袋をすっぽりかぶる。雨の中を船で走っていると、体温が奪われて、ひどく寒い。我々は 30 分ほどで船から下りたからまだいいが、他のツアーに行った池田さんらは 1 時間半も船の上で雨に打たれ、凍死するかと思うほど寒かったらしい。「日本人、アマゾンで凍死！」なんて洒落にもならん。

船着き場に着き、アチュアルの少女が持ってきた傘をさして上陸。レディ・ファーストで船曳さんがまず上陸し、アチュアルの小父さんと手に手を取って急な坂を上る。ムム、あれは今回彼女のナイトを任じている私の役目ではないかとブツブツ言いながら見ていると、足を滑らせて、いきなり二人が落ちこちた。こちらはまだ船の中だから、どうしようもない。怪我がなかったのが不幸中の幸いだが、二人はもう泥だらけ。

アチュアルは大家族で一夫多妻。我々が訪問した家には 28 人が住んでいるという。訪問の際に守るべきしきたりがいくつかある。その一つが「女性を見つめないこと」。何のこと？男が女を見つめてはいけませんが、女が男を見つめるのはいいのか？男が男を見つめたり女が女を見つめるのはもっとヤバ筋かもなど、ろくでもないことが頭に浮かんだが、よく訊いてみると、女性を見つめるのは「嫁さんに欲しい」という意思表示だそう。ま、ずっと見つめていたいような可愛い娘はいなかったが。

もう一つのしきたりは、「勤められた酒を断らないこと」。こっちの方はまあ大丈夫と思っていたが、出てきたのはとんでもない酒。椰子の実を半分に切ったカップにドロツとした濁り酒のようなものがなみなみと入っている。発酵が

進みすぎてアルコールはほとんどなく、ちょっと酸っぱいヨーグルト系。口を付けただけでめげの人が多かった。この酒をお代わりしたのは、僕が初めてとか。あとで訊くと、これはポテトの一種を噛み噛みしてベツと吐き出し発酵させたもの。うわさに聞く「噛み酒」である。

アチュアルは、30 数年前までは、文明世界に知られていなかった。部族語（アチュアル語）を話し、猿やカピバラ（大型の齧歯類）を狩り、ピラニアを釣り、果物を採集する。少しばかりの畑で、ジャガイモ・トマトなどを作る。貨幣はなく、基本的には物々交換の経済である。しかし、近代化の波はアマゾンの奥地にも押し寄せる。アチュアルの居住区は国境を挟んでエクアドルとペルーに分断された。貨幣経済も浸透しつつある。アマゾンでは、熱帯雨林が伐採されて居住区を失ったり、無計画な観光開発の標的にされて独自の文化を喪失していく部族も多いのだ。

我々が宿泊したカパウイ・ロッジは、アチュアルの居住区に 1996 年に造られたエコ・ロッジ。小型機が発着できる滑走路と、20 棟の高床式のキャビンがある。キャビンの電灯は 12V の小球で、太陽光発電である。お尻を拭いた紙は水で流さず、カゴの中に捨てる。紙は自然環境



太陽光で暖められるシャワー用の温水バッグ

ではなかなか分解されないからである。シャワーは日中太陽光で温められた水。環境に負荷をかけないように、さまざまな配慮がなされている。

注目すべきは、このロッジ開発がエクアドル政府とアチュアルの共同の計画であったこと。南アメリカでは初めての「社会的実験」という。ロッジ訪問者には、バードウォッチング・ハイキング・アチュアル集落の訪問・パドリング(カヌー体験)・夜間ジャングルクルーズなどのプログラムが用意されており、アチュアルのガイドと英語・スペイン語を話すエクアドル人のガイドが付く。ロッジの補修や清掃にもアチュアルの若者たちが参加している。政府は現在、月に2000ドルをロッジ使用料としてアチュアルに支払っている。政府とアチュアルはこのロッジを共同経営しているわけだが、2011年にアチュアルは政府からロッジのすべてを譲り受け、単独経営することになる。

私はこの「社会的実験」に、非常な感銘を受けた。滑走路の建設だけで200万ドルかかったというこの施設を、アチュアルにくれてやるというのだ。それでもちゃんと元は取れると踏んでいるのだろうが、潔いと感じるのは僕だけだろうか。先住民族が孤立して生活する時代は過ぎた。良くも悪くも、外界との交流なしにやっていくことはできまい。貨幣経済もスペイン語もどんどん入ってくる。そういうときに、何を守り、何を発展させるべきなのか？アチュアルは明らかに、歴史の曲がり角に立っている。この「社会的実験」の成功は、南アメリカのすべての先住部族にとっての朗報となるだろう。

カパウイ・ロッジに働くアチュアルの人々は、彼らの文明開化の先頭に立っている。彼らはスペイン語や英語を理解し、市場経済のノウハウを学んでいる。しかし、村に住む一般の人々は

どうだろう。そう思いながら、我々はアチュアルのティーチャーの話を聞いた。教材も少なく、アチュアルの子供たちにスペイン語を教えるのは並大抵ではないらしい。村の中にいる限りアチュアル語しか話さないのだから、無理もない。私はすっかりアチュアルに入れ込んでしまった。退職したら、またここに来て、アチュアルのティーチャーの手伝いでもしようか。それまでに、スペイン語をマスターしておこう。

最後に、神話に出てくる common potoo の鳴き声を教えてもらった。ホロロ・ホロロと鳴くのだという。これが、天界に去ってしまった夫を慕って鳥になった女の、嘆きの歌である。

エクアドル紀行 8

アマゾンの森には、さまざまな動物が住んでいる。よく目立つのは鳥。ペリカンのように大きなくちばしを持ったオオハシ(大嘴)がいる。ツメバケイ(爪羽鶏)はその名の通り、始祖鳥のように翼から爪が生えている原始的な鳥。オウムにはたくさんの種類がある。真っ赤な羽のスカレット・マカウや青と緑のグリーン・マカウなど、派手な色彩のものが多く、オウムたちは近くの崖に集まって土をついばむ習性があり、この崖はバード・ウォッチングのコースとなっている。オウムは果実食で栄養が偏るので、土を食べてミネラルを補給するのだという。

哺乳類もサル類・カピバラ・タピア・オセロットなどたくさんいるらしいが、ほとんどは夜行性であり、私が見たのはホモ・サピエンスを除けばリスザルだけだった。甲田さんはジャガーの足跡を見たという。ジャガーやピューマと遭遇したら素晴らしいと思うが、とても無理である。ただし、アマゾン川には淡水イルカが2種類いて、ジャングル・クルーズに行けば、舟から見るができる。

両生・爬虫類にも、なかなかお目にかかれ
ない。夜間クルーズで、あそこにカイマン（ワニ
の一種）がいるといわれたが、どこにいるか私
には分からなかった。要するに、ジャングルを
かき分けて道なき道を行くと、大木にアナコン
ダが巻き付いており、ジャガーやピューマが人
間を襲おうと身構えているといった「アマゾン
のイメージ」はうそっぱちなのである。これら
の動物を見ようと思ったら、テレビ番組の方が
ずっといい。

川には、ピラニアなど、たくさんの魚がいる。
船着き場付近にもピラニアは多いが、泳いでも
危険はないらしい。ただし、ピラニアは血に反
応するから、怪我したときに泳いではいけない。
名を忘れたが、ドジョウのようなやつが一番危
険で、泳いでいると、口や鼻など、我々のすべ
ての穴に潜り込み、肉をかじるという！！

昆虫で目立つのはシロアリとアリ。木々に、
サッカーボールくらいの褐色のかたまりが付い
ている。これはシロアリの巣であり、巣からあ
ちこちにシロアリの道が付いている。アリは凄
まじい。アミーゴ黒田が革手袋越しにコンガと
いう大型のアリに咬まれた。革が破れており、
相当に痛かったらしい。たぶん同じアリに咬ま
れた池田さんは、手がしびれ、痛みが収まるの
に4時間かかったという。攻撃的で、日本でい
えばスズメバチみたいなものだ。

池田さんは軍隊アリにも咬まれていた。群れ
をなして行進し、虫や人に襲いかかるやっかい
な奴である。森の中で葉切りアリにも遭遇した。
このアリは植物の葉を切り取って、巣の中に運
ぶ。彼らは、この葉に水をかけ、葉に生えるキノ
コを収穫するのである。人間よりずっと昔に
農耕を開始した虫である。

マラリアの薬を飲んだので、蚊に刺されても
心配はないが、思ったより気温が低いのためか、

蚊やブヨなど吸血性の虫は、ほとんどいない。
この薬は副作用が強く、目が見えなくなること
があると脅かされ、飲まない人も多かった。ま
あ、何事も経験。目が見えなくなったら、一日
中寝ていればいいだろう。

エクアドル紀行9

隣はレディのキャビンである。その近くで、
とんでもないものを見つけた。社会性のウズグ
モである。文献で知ってはいたが、実物を見る
のは初めてである。データを取れば、短い論文
くらいは書けるかもしれぬ。ちょっと腰を落ち
つけて観察することにした。

体長5~7mmほどのこのクモは直径10cmほ
どの円網を作る。約40匹のクモがそれぞれの
網を持っていて、網と網は共通のサポート・ラ
インで繋がっている。コロニーの大きさは、幅
0.8m、高さ0.7m、長さ1.5mほどか。単身者
のワンルーム・マンションみたいなもので、集
合住宅ではあるが、それぞれの網は作ったクモ
の持ち物である。餌がかかると、クモは盛んに
糸を巻き付けて、これを捕らえる。餌は、それ
がかかった網の持ち主のもの。ここまでは単純
明快。

しかし、大きな餌がかかると、話がややこし
くなる。糸を巻き付けても、なかなか餌を取り
押さえることができない。そのうちに、隣のク
モが助っ人に駆けつけ、2匹または3匹が一
つの餌に糸を投げかけることになる。一人では
できないことも、隣人の協力があれば可能となる。
大きな餌は、クモたちの共同作業で取り押さ
えられてしまう。クモの世界にも人助けがあるの
かと思ってみていると、さにあらず。分配は行
われず、餌の捕獲に参加したすべてのクモが自
分の所有権を主張し、争いが起こる。しかし、
争いがつかみ合いの喧嘩に発展することはほと

んどなく、たいがいは小さなクモが所有権を放棄して、餌から離れてしまう。網の持ち主の身体が大きければ餌は持ち主のものになるが、侵入者の方が大きければ餌は侵入者のものになるのだ。

この場合、大きなクモは圧倒的に有利である。小さなクモは、自分の網にかかった餌を侵入者に奪われてしまう。隣の網にかかった餌の捕獲に協力しても、その分け前に預かることができなければ、全くのただ働きだ。それならどうして、小さなクモは大きいクモと一緒にコロニーを作るのだろうか？コロニーから離れた、大きなクモに邪魔されない場所に、網を張った方がずっといいのではないかと？

夕食後にもう一度見に行き、私はびっくりした。網はほとんど壊れ、大きなクモたち（体長約 7mm）のほとんどは、コロニーの真ん中に集まっている。お互いに 1~2 cm のほどの間隔を保って直径 30~40 cm ほどのルーズな塊を作り、休息している。そして小さなクモたち（体長約 5mm）は、コロニーの周辺部で、網に残された餌の塊に食いついている！さらにもっと小さい、彼らの子供と思われる体長 1mm ほどのクモたちがコロニーの周辺部に侵入し、あちこちに小さな網を張っているのだ！

要するに、大きなクモが食べきれなかった餌を網に放置したままで休息に入り、小さなクモや子供たちがそれを食べているということらしい。昼間に観察したときは実力本位の競争社会にみえたが、こうしてみると、余分の餌を弱者にも分け与える心やさしい社会でもあるらしい。

それにしても、ここは場所が悪い。レディのキャビンの前なので、彼女が目覚めたようだから、シャワーの最中らしいとか、中の様子が手に取るように分かるのだ！変な小父さんと言われても仕方がない。

ムレサラグモに網はあるのか？

新海 明

ムレサラグモという名前は北海道のリストで見ていたのだが、私にとってその姿や形はまったく未知のクモだった。2003 年の夏に北海道上士幌町糠平の地で出会い、私はこの種の張る奇妙な網にひきつけられてしまった。

2003 年 8 月 21 日、日本蜘蛛学会の大会と抱き合せて開催された東京クモ談話会の合宿 2 日目のことだった。この日の観察地は然別湖と白樺峠だった。午前中は然別湖北岸のキャンプ場でヤマキレアミグモやニワオニグモを腐るほど見た。ここで昼食をとり、午後の観察地である駒止湖の先の白樺峠へと向かった。ここは東ヌブカウシヌプリへの登山道入口である。この山でマツダタカネオニグモが採れるという松田まゆみさんの案内で、東ヌブカウシヌプリへ向かう一行と、登山は少々きつそうだという一行に別れた。私は当然「残留組」だった。この周辺にはアカオニグモやキバナオニグモやニワオニグモなども群棲しているとのことである。また、松田さんによれば白樺の樹皮上にはムレサラグモがいるとのことだった。これと目撃もなかった私は、アカオニグモの写真を狙っていた谷川さんの手伝いでもしようかと、「色合のよい」アカオニグモを探し回っていた。しばらくすると小澤さんが白樺の樹皮近くでムレサラらしきクモを発見したという。初めて見るクモだったので、是非とも見ておこうと白樺の木のそばにいくと、樹皮と小枝の間に小さな皿網があった。私の第一印象は「なんだこんな網を張るのか」「北海道特産のサラグモだからといって何が変わっているのだろう」という素っ気ないものだった。拍子抜けしたようにムレサラに対する興味はしぼんでしまった。あとで気がついたのだが、この時に我々が見たものはムレサラ

グモではなかったのだ。なにしろ、残留組でこのクモのまともな生息するその姿を見たことがあるのは、うちの兄くらいしかいなかったのだ。その兄はいつものように山の中に姿を消したままであった。

歩き回る？サラグモ！

ムレサラグモのことなどすっかり忘れて、その晩の観察会に出かけた。場所は糠平の宿舎の近くの神社周辺であった。このあたりには「ヒグマに注意」との立て看板がやたらと目立つ地域である。けれども懐中電灯を片手にワイワイと移動する集団には、さすがのヒグマも近づけなかったに違いない。私も林道をそれて林内に分け入った。すると、谷川さんが何やら熱心に樹皮の上をみていた！「ムレサラグモがいましたよ」と呼び掛けられて、ふと見たそのクモの姿は昼間に見たものとも、はじめに想像していたものともまったく異なっていた。第一印象は「小さなナガイボグモ」だ。私は西表島でナガイボグモ（正確にはヤエヤマナガイボグモ）を何度か見ていたのだ。樹皮上での占座姿勢、樹皮と見間違っばかりの迷彩をほどこした色合、逃亡するときの素早さ。これらは関東地方では馴染みのキハダエビグモとも異なり、少し繊細なナガイボグモというのがぴったりなのだ。しばらくすると池田さんも加わりムレサラ探蛛会となってしまった。このクモの姿形やどんな場所にどのように生息するのかが一度わかってしまえば、ここにもあそこにもムレサラを次々に見いだすことができた。懐中電灯の明かりに誘引されて寄ってきた小さなハエがムレサラによってひっつかまえられて一瞬で捕らえられた。その様子は「このクモは樹上徘徊性のクモではないか」と思わせるものだった。じっとしているムレサラにピンセットなどで触るとアツ

いう間に走り去った。その素早さは造網性のクモとはとても思えなかった。合宿に参加してこのようなムレサラの行動を見た方は、私も含めて「網を張らない樹上徘徊性のサラグモではないか」との印象を持ったはずである。

やっぱり「網」があった

さて、合宿の最終日である8月22日は糠平から旭川・層雲峡へと伸びる国道273号線沿いにある幌加除雪センター周辺で採集会が行なわれた。ここにも多くのムレサラが生息していた。何頭かのムレサラを観察していると、樹皮上に「網」と思われる糸が張りめぐらされていることに気づいた。折しも太陽の光が樹皮上の糸に反射して、観察や写真撮影に格好の条件を作り出していたのだ。このときに撮ったムレサラの網の写真を示す(図1)。翌日からはクモ学会の

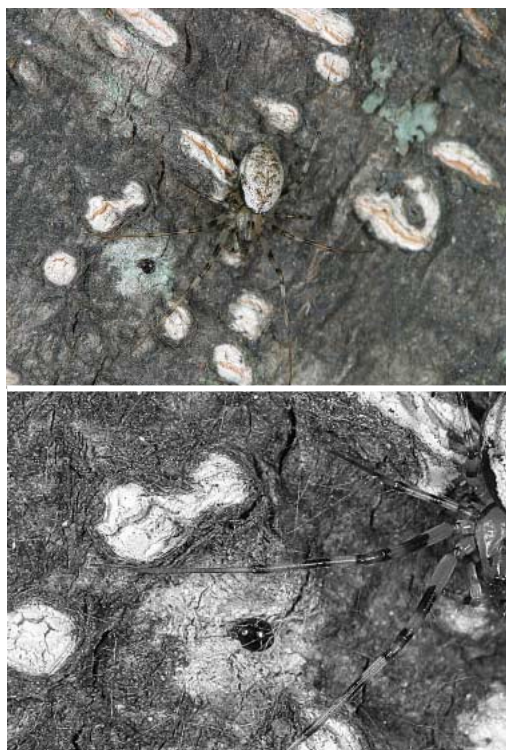


図1. ムレサラグモとその近くに見られた網

大会が始まってしまう。ここでしっかりと観察しておかなければ次にいつ出会えるかわからない。私はムレサラが生息していたさまざまな樹皮の中から一本だけを選び調査の対象を定めた。樹木の太さはおよそ 30cm, この樹の高さ 1.5 m から 1.9m のところにムレサラグモがなんと 9 頭 (6 頭, 3 頭) もいたのだ。私は、これら 9 頭のムレサラについて午前 10 時 35 分から午前 11 時 35 分までの 1 時間、その行動を逐一記録した。

樹皮上にはしばしばアリやザトウムシが歩行していた。60 分間の観察中にムレサラとアリは 2 回、ザトウムシとは 1 回の遭遇を目撃した。このうちアリと遭遇したムレサラの行動を記録した。アリと出会ったムレサラはいずれも瞬時に逃亡した。1 例 (a) は占座点から 1 ~ 2 cm, もう 1 例 (b) は 4 ~ 5 cm ほど離れて止まった。そして、a 個体は 180 秒後に、b 個体は 50 秒後に逃亡する前に占座していた全く同一の場所に戻った。さらに、別個体についてその占座点の 3 ~ 4 cm 下方の樹皮上を指でこすってみた。するとムレサラは一気に 20 ~ 30 cm もしおり糸をひいて落下した。落下点で 120 秒ほど静止していたが、その後しおり糸をつたってやはり占座点へと戻った。

これらの一連の観察結果は図 1 に示した樹皮上の糸が単なるしおり糸ではなく、ムレサラグモの「網」であることを示唆している。私がかぎりでは、これと類似の網はヒメグモ科のコケヒメグモがある (新海 1994)。コケヒメグモの網も樹皮上に張りつくように作られ、ちょっとした窪みに占座点を設けている。そして、この網に侵入した昆虫がいると素早く駆け寄り、ヒメグモ科に特有にみられる「粘球糸」投げ掛けて獲物を捕らえる。ムレサラグモの場合には粘球糸は使用しないが、樹皮上の網にひっかか

ったり、そばに飛翔してきた昆虫に反応し、それをひっつかんで捕獲するようである。

おわりに

北海道へは大学時代に毎年のように通いつめた。テレビの「北の国から」で有名になった富良野市の麓郷というあたりだった。大雪山系のトムラウシ岳や日高山脈の幌尻岳にも登った。富良野市周辺の林床には当時はまだ幻のクモであったエゾトタテグモがたくさん生息していることを知ってびっくりした記憶はあるが、ムレサラグモの存在には全く気づかなかった。どのようなクモの場合でも同じなのだろうが、一度探す「コツ」を呑み込めば、案外簡単に見つけられるようになるものだ。ムレサラグモもその棲息数はかなりのものである。北海道での分布はどうなのだろうか。また本州の高地には生息していないのだろうか。機会があったら是非調べてみたいものである。

採集情報

日本各地で採集された、稀産種や分布上の重要種などについての情報を掲載する。これを読み、「私もこんな種類を採集しているぞ」という方はその情報を是非お寄せいただきたい。

キジロオヒキグモ

東京都八王子市上川 2003 年 9 月 27 日
幼体 2 安藤昭久

スズミグモ

神奈川県横浜市都筑区茅ヶ崎中央町都筑中央公園 2003 年 6 月 26 日 幼体 1 (緑褐色まだら型) 秋元昇

神奈川県座間市入谷座間谷戸山公園 200
3年8月17日 不明1(赤色型) 唐沢
良子

神奈川県座間市入谷座間谷戸山公園 200
3年8月22日 1(赤色型) 土屋昌利

クロマルイソウロウグモ

千葉県君津市上総亀山 2003年6月29
日 成体1, 幼体3 新海 明

チュラオニグモ

屋久島西部林道 2003年9月18日
成体1 屋久島宮之浦 2003年9月21日
成体1 駒野英昭 岡田匡平 高津素夢
【屋久島新, 分布北限更新】



チュラオニグモ

ヤマトミジグモ

北海道江別市野幌森林公園 2003年6月
28日 成体1 石田裕一 【北海道新】

ビジョオニグモ

北海道小樽市張碓町 2003年8月30日
成体1 石田裕一 【北海道新】

オオクマヤミイロオニグモ

北海道江別市野幌森林公園 2001年9月
19日 成体1 石田裕一 【北海道新】

(新海 明・谷川明男)



「埼玉動物研通信 No. 44」

本書は1978年に刊行された「埼玉県動物誌」の調査, 編集関係者により1983年に発足した「埼玉県動物研究会」の会誌である。1985年創刊以来編集, 発行を一手に引き受けるのが八チの研究者南部敏明氏であるが, 氏は日本蜘蛛学会の会員でもある。そもそも発刊の目的は埼玉県動物誌改訂版に向けたデータ蓄積であり埼玉県内の採集記録が中心であるが, 内容には特に制約はないようである。会員である筆者のもとに送られてきた最新の44号に前述の南部氏による「*Pison koreense* (Radoszkowski) コウライクモカリバチの習性(1)」と題する報文が載っている。クモ学会のニュースレターになぜ八チの話を, と訝る向きもあろうがクモを狩る八チの一つとして *Pison* 属の名をご存知の方も少なくないだろう。コウライクモカリバチ(以下コウライ)は埼玉県では過去に本庄市から記録されているのみの珍種で埼玉県レッドデータブック絶滅危惧種 B類にランクされているらしい(前掲文より)が, 今年の夏南部氏の自宅物置にある木製引き出しの鍵穴に巣を作るという僥倖に恵まれたことでこの観察記録は生まれた。要約すると, コウライは1つの巣(この場合は鍵穴)に土でできた1cmにも満たない小さな

壺を8~10個作りその中に幼虫の餌となる prey (獲物) を詰め込むのだが、なんとそれがすべてネコハグモなのである。複数の巣からクモがまだ食べられていない8個の壺について調べた結果平均48頭、体長1.3~2.5mmの幼体(時期は7月)を狩っていた。卵は1壺に1個、クモの腹部背面に産みつけられる。クモと壺に使う泥を運ぶ時とでは行動パターンが違うものの短時間で戻ることから近場で調達するらしい。

実は今回壺の中のクモを同定する機会に恵まれたが、まだまだ自然には謎が満ちており、奥深いものであることを改めて思い知らされた。今回はコウライの第1世代についての観察結果であったが、南部氏によると第2世代についての続編があるとのこと楽しみである。印刷も南部氏が手がけられている関係上120部しか印刷されておらず勿論別刷もないが、もし興味を持たれた方は下記の南部氏宛に直接問い合わせられてはいかがだろうか。1冊200円、送料160円を負担のこと。

埼玉動物研通信 (No. 44), 埼玉県動物研究会発行。B5版, 49頁。

〒369-1202 埼玉県大里郡寄居町桜沢2397-2 南部敏明

E-mail: n-hachi@d7.dion.ne.jp

(平松毅久)

オペレッタ「夜叉蜘蛛」観覧記

2003年10月4日。東京調布市にある「くすの木ホール」で中島はるさんによる創作オペラ「夜叉蜘蛛」を観た。これは我々クモ仲間のあいだではつとに有名な伊豆「浄蓮の滝」の蜘蛛伝説をモチーフとして、脚本にスタジオ「ジブリ」的なスパイスを効かせ、開発によって失われようとしている森に潜む縄文人の想いを描く

ことで、自然を守ることの大切さを謳い上げた作品である。

切り倒そうとした大木の根元にうごめく大きな蜘蛛(ステージ上に蜘蛛が現われたわけではないが・・・)を安全な場所に移そうとした縄文人イシルベの石斧に蜘蛛が糸を巻きつけて岩陰に落としてしまうというストーリー。その岩陰に投影された、CGを駆使した網の数々やそこを這う蜘蛛などは我々クモ愛好家をして大いに喜ばすものであったろう。わが会員でもある中島はる(中島晴子)さんはオペラなど西洋音楽の作曲家であるとともに、箏曲作家でもある。夜叉蜘蛛の中でも随所にソプラノと琴との共演がちりばめられていた。私は「クモ」のことは多少語ることができて「音楽やオペラ」を語る資格など到底ないことはよく承知している。しかし一時のあいだにせよ音楽学校に籍を置いたため、オーケストラと琴の合奏を聞く機会に何度か遭遇した。それらはいずれも意欲的な創作であったが、私の耳には馴染まなかった。けれども、この舞台上で夜叉蜘蛛が歌い上げたソプラノと琴の音色は実に自然に私の体の中へとすべり込んでしまった。演奏者お二方の実力の賜であると同時に、曲を創られた中島はるさんの西洋音楽に日本の音を織り込ませる作曲家としての手腕の一端を垣間見たような気がした。

残念ながら今のところ再演の予定はないようだが、本公演のVTRが残されているとのことである。観覧ご希望の方は中島さんまで直接問い合わせられてはいかがだろうか。私は、日本各地の自然保護に関わる団体が「森のオペラ」とも称して上演を企画すれば面白い催物ができるのでないかと期待している。嫌悪される動物のナンバーワンに位置する「クモ」を「オペラ」に取り入れるのみならず、「夜叉蜘蛛」と演題に銘打った中島はるさんの大胆かつ意欲的

な挑戦に心からの賛辞を送りたいと思う。

(新海 明)

最近気がついた分類関係の文献

最近発表された日本のクモの分類に関連のある論文をいくつか簡単に紹介する。

: Ono, H. 2003. A new Dictynid spider from Iriomotejima Island, Southwest Japan, with a list of Japanese species of the genera *Lathys* and *Brommella* (Arachnida, Araneae). Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, 29:7-13.

・ *Lathys insulana* Ono 2003 シマカレハグモを新種として記載。

・ *Lathys maculosa* (Karsch 1879)をシノニムから復活させ、和名はヤマトカレハグモとした。(*Lathys maculosa* は *L. ocellata* , *L. orientalis* とともに *L. puta* の新参シノニムとされ、キイロカレハグモの和名で呼ばれていたが、前3者を *L. puta* のシノニムから復活させ、*L. ocellata* と *L. orientalis* は改めて *L. maculosa* の新参シノニムとした。)

・ カレハグモの学名を *Lathys annulata* とした。(*L. annulata* は *L. humilis* の新参シノニムとされていたが、これを復活させた。)

・ *L. novenbris* ルリカレハグモをカレハグモの新参シノニムとした。

・ ナシジカレハグモを *Lathys* から *Brommella* に移した。

: Tanikawa, A. 2003. Two new species and two newly reorded species of the spider family Pisauridae (Arachnida: Araneae) from Japan. Acta Arachnol.,

52:35-42.

・ *Dolomedes orion* Tanikawa 2003 オオハシリグモと *D. zatsun* Tanikawa 2003 ササキハシリグモを新種として記載。

・ *D. horishanus* Kishida 1936 ヘリジロハシリグモと *Pisaura bicornus* Zhang & Song 1992 サイハウキシダグモとを日本新記録として再記載した。

: Ihara, Y. 2003. *Cybaeus akiensis* n.sp. (Araneae: Cybaeidae) from western Honshu, Japan, with some notes on its biology. Acta Arachnol., 52:51-57.

Cybaeus akiensis Ihara 2003 アキナミハグモを新種として記載した。

(谷川明男)



ギャラリー



『なんだ このハイトリは!』

パプアニューギニアで撮影した。同行の高橋孝洋氏が発見。私も池田博明さんも、その異様な姿にただ唖然とするばかりであった。

(谷川明男)

遊絲 11,12 号会計報告(2002.8~2003.7)

収入

寄付	162873 円
学会補助	0 円
繰越金	10560 円
合計	173433 円

支出

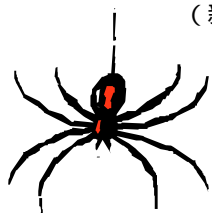
遊絲 11 号送料	56700 円
(会員名簿発送を含む)	
遊絲 12 号送料	23760 円
紙 / 封筒 / プリントナー	40896 円
小計	121356 円
次号繰越金	52077 円
合計	173433 円



編集後記

昨年は遊絲の営業活動(寄付金集め)を精力的に行い、例年の倍近いご寄付を賜った。ご希望によりお名前の公表は控えさせていただくが数名の方からは多額のご寄付を頂戴した。そのため、今年の夏のクモ学会大会では恒例となっていた寄付金袋の会場内巡りをしないで済ませることができた。総会での寄付金袋の巡回は毎年とのことなので担当者としてはいつも心苦しい限りである。これからは無理のない程度での「営業活動」を続けていこうと決めている。ご支援とご協力をいただければ幸いです。

(新海 明)



原稿送付先

〒192-0352 八王子市大塚 274-29-603

新海 明まで

E-mail では dp7a-tknw@j.asahi-net.or.jp (谷川明男) まで

発行は、年 2 回(5 月, 11 月)の予定。締切は発行月の前月末日です。

日本蜘蛛学会

入退会は

庶務幹事

〒990-2484

山形市籠田 2-7-16

吉田 哉

Tel: 023-643-0097

Fax: 023-645-0698

E-mail: araneae@mb.infoweb.ne.jp

会費の問い合わせ及び住所変更は

会計幹事

170-0004 豊島区北大塚 3-12-21

笹岡文雄

E-mail: spydm@big.or.jp

Tel 03-3918-1945

年会費 正会員 7000 円(学生は 5000 円)

郵便振替口座 00970-3-46745

図書幹事 渡部 健

ホームページ: <http://www.asahi-net.or.jp/~hi2h-ikd/asjapan/index.htm>

遊絲 第 13 号

2003 年 11 月 25 日発行

編集者 新海 明, 谷川明男, 池田博明

発行者 日本蜘蛛学会 会長 吉田 真
